

おお くら かず ちか  
大倉和親



大倉和親 (1875 ~ 1955)

出典：『日本陶器七十史』1974

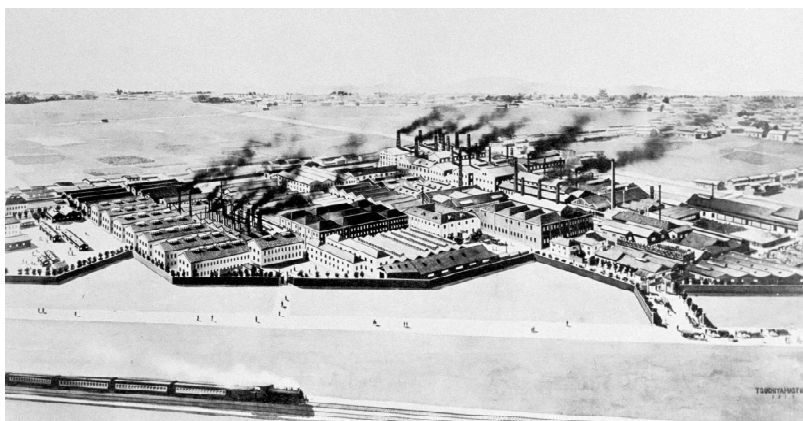
大倉和親は、ドイツのワグネルが開発した石炭窯で初めてコーヒカップ等の小型の磁器の製造に成功し、アメリカに輸出した。磁器の製造に石炭窯を使用したのは日本では初めてであった。続いて本命の直径25cmの大型のディナー皿を作るために、東京高等工業学校(現東京工業大学)卒の江副孫右衛門(後に日本碍子の第2代社長)を引率して、ドイツ



1914(大正3)年に日本で初めて完成したディナーセット「セダン」 出典：『ノリタケ100年史』

### ■ファインセラミックス産業の生みの親

大倉和親は1905(明治38)年、芝浦製作所(現東芝)の岸敬二郎技師の助言を得て高圧碍子の国産化を目指し、1919年に日本碍子(株)を設立した。初代社長をつとめ、第2代社長は江副孫右衛門であった。1936(昭和11)年には自動車用点火栓の製造を行う日本特殊陶業(株)を設立し、初代社長は江副孫右衛門が務めた。近年、これらの製品はファインセラミックスの分野で世界のトップシェアを占めてきた。大倉和親はまた、1907年、自社用陶磁器の底摺り用砥石の製造を開始



日本陶器株式会社時代の本社工場

出典：『名古屋製産品案内』1931

## 最高の「モノ」をつくりたい

— 世界一のセラミックス産業の礎を築く —

### ■輸出用磁器の事業化に着手

福沢諭吉の「国の独立を保つ根本は、貿易を盛んにして国を富ませることにある」に感銘を受けた森村市左衛門は、陶磁器の輸出を目的に1876(明治9)年、大倉孫兵衛らと共同で森村組を設立し、ディナーセット(大型の白色硬質磁器)を米国向け輸出の主力商品とした。

大倉和親は大倉孫兵衛の長男として1875年、東京日本橋に生まれ、1894年に慶応義塾を卒業後、若手の幹部として森村組に入り、ニューヨーク支店に8年間勤めた。1896年、東京工業学校(現東京工業大学)卒の飛鳥井孝太郎(後に名古屋製陶所の初代社長)を引率してドイツの粘土工業化学研究所を訪れ、持参の生地が白色硬質磁器に適しているとの評価を得て、事業化に乗り出した。

### ■『ノリタケ』ディナーセットが米国で一番売れる

大倉和親は1904(明治37)年に洋食器製造専門の日本陶器合名会社を創立し、初代社長



日本陶器を創立した森村組の幹部たち

前列左から大倉孫兵衛、森村市左衛門、広瀬実栄  
後列左から森村開作(市左衛門の次男)、村井保固、大倉和親

出典：『ノリタケ100年史』

の粘土工業化学研究所を再訪した。適切な原料組成からなる生地の調整及びディナー皿用生地

の中心部を厚くすることが不可欠であるとのアドバイスを研究所からもらい、1913(大正2)年、大型ディナー皿の製造に成功した。アメリカへのディナーセットの輸出は1916年が1万セット、1918年には4万セットと年々増加した。米国への輸出品の主力となり、イギリス製品を上回って一番売れた。名古屋港からの外国向け陶磁器の出荷量は1919年から1966(昭和41)年までトップを占めている。

1919年(大正4)年、高圧碍子の国産化を目指し、1919年に日本碍子(株)を設立した。初代社長をつとめ、第2代社長は江副孫右衛門であった。1936(昭和11)年には自動車用点火栓の製造を行う日本特殊陶業(株)を設立し、初代社長は江副孫右衛門が務めた。近年、これらの製品はファインセラミックスの分野で世界のトップシェアを占めてきた。大倉和親はまた、1907年、自社用陶磁器の底摺り用砥石の製造を開始し、1939年には日本陶器(株)(1917年発足)の第3代社長社長、飯野逸平が太平洋戦争に備えて航空機用ボールベアリングの研削砥石の開発に成功した。米国への高級磁器の輸出が停止される中、日本陶器は、わが国第1位の研削砥石メーカーへと成長した。

大倉和親は、陶磁器産業からファインセラミックス産業まで、絶え間ない技術革新を通して多くのリーディング企業を育て、日本の経済発展を先導した。

(亀山哲也)